

朴 秀娟(神戸大学)

1. はじめに

本発表では、日本語学習者(以下、「学習者」とする)の叙法副詞の習得過程を分析し、学習者による話し手の評価・感情を表す副詞の産出に関して考察を加えた結果を述べる。

本発表でいう「叙法副詞」は、工藤(1982)による陳述副詞の下位分類の一つである。工藤(1982)は、陳述副詞を、叙法副詞(例:たぶん、どうぞ、はたして)、とりたて副詞(例:ただ、すくなくとも)、評価副詞(例:あいにく、奇しくも)の三つに分類する。叙法副詞は、文の語り方＝叙法性(modality)に関係する副詞で、叙法の程度を強調・限定したり、文の叙法性を明確にしたりする副詞であるとされている。叙法副詞の習得に注目した理由は、主に次の二つである。

- ①叙法副詞には、特定の述語形式と呼応現象をもつもの(例:ぜんぜん[～ない]、もし[～たら])と、そうでないもの(例:たしかに、どうせ)がある。
- ②叙法副詞には、「せつかく」「どうしても」のように、単に叙法の程度を強調・限定したり、文の叙法性を明確にしたりするだけでなく、事柄に対する話し手の評価・感情が前面に出ている副詞が含まれている。

従来における副詞の習得研究では、特定の述語形式と呼応現象をもつ副詞のほうが、そうでない副詞よりも習得されやすいことが指摘されているが(川口・佐々木 1996)、話し手の主観的、心理的態度を表す副詞の産出が難しいという指摘もある(朴 2020)。本発表では、叙法副詞を対象に、これら二点を総合的に検証し、その結果として、学習者による話し手の評価・感情を表す副詞の産出に見られる傾向を探る。

2. 叙法副詞の習得に関する従来の指摘

副詞の習得をめぐっては、これまで、個々の副詞の習得に関する研究が主であったが、大規模な学習者コーパスの構築・公開に伴い、近年では、コーパスに基づいた、副詞全般、または、特定のグループに属する副詞全般を対象とした習得研究も盛んに行われつつある。本研究が注目する叙法副詞、またはそれに準ずる副詞の習得に注目している研究には、胡(2019)、胡(2022)がある。

胡(2019)では、「多言語母語の日本語学習者横断コーパス(International Corpus of Japanese as a Second Language)」(以下、「I-JAS」とする)に収録されているデータのうち、中国語、韓国語、英語を母語とする学習者のデータを対象に、呼応現象をもつ叙法副詞の使用状況について考察を行っている。日本語母語話者(以下、「母語話者」とする)による使用状況とも比較しつつ¹、学習者の使用には多様性が欠けること、レベル(日本語能力試験 N1～N4)によって習得の難易度が異なること、母語話者が使用した副詞と共通するものも多く見られるが学習者独自による使用も見られること、誤用はタイプ化できることなどを指摘している。

胡(2022)も、同じく I-JAS のデータを分析した研究であるが、叙法副詞ではなく、陳述副詞という範疇のなかで、12 種類の副詞(必ず・ぜひ・いったい・なんて・きっと・たぶん・決して・あいにく・まるで・もし・確かに・ただ)について、学習者の使用実態を明らかにした研究である。考察の結果として、学習者は、頻度、多様性のいずれにおいても、母語話者に比べて欠けること、「たぶん」の過剰使用および「やはり」の過少使用が見られること、母

¹ I-JAS には、同条件のもので収集された日本語母語話者によるデータも収録されている。

語やタスクによって頻度や多様性の程度に違いが出ること、頻度、多様性ともに、習熟度が上がるにつれて母語話者に近づいていくが「たぶん」の過剰使用および「やはり」の過少使用は依然として見られることなどが述べられている。

本発表でも、胡(2019)、胡(2022)と同様に、I-JAS のデータを用いて学習者による叙法副詞の使用に見られる傾向を分析した結果を述べる。しかし、本発表では、特定の叙法副詞に限定するのではなく、産出されたものすべてを対象とする。また、叙法副詞と分類される副詞の使用傾向に注目するというよりも、習得過程ならびに習得されやすいものと習得されにくいものの間に見られる違いについて注目する。

3. 調査方法

本調査では、I-JAS のデータを対象に考察を行った。I-JAS には、12 の異なる言語を母語とする学習者と母語話者による発話データおよび作文データが収録されている。本調査では、英語(100 名)、中国語(200 名)、韓国語(100 名)を母語とする学習者および母語話者(50 名)の発話データ、なかでも、対話(インタビュー)、ロールプレイ、ストーリーテリングのデータを考察対象とした²。これら三つのタスクのデータから、国立国語研究所のコーパス検索アプリケーション「中納言」を用いて、品詞が「副詞」とされているものを抽出し、その中から、工藤(1982, 2000)を参考に、叙法副詞として扱えるものの選定を行った(副詞の内訳および数は次節を参照)。また、学習者の日本語能力については、J-CAT のスコアを基準に分類している³。スコアによるレベル分けおよびレベルに関する説明は、表 1 のとおりである。

表 1. J-CAT のレベルの目安(李ほか 2015:58)

得点	レベル	説明
0-100	初級	基本的な考えを述べることができる
101-150	中級前半	日常的な会話をこなすことができる
151-200	中級	
201-250	中級後半	
251-300	上級前半	学術的・専門的なコミュニケーションができる
301-350	上級	
351-400	日本語母語話者相当	

4. 調査結果と考察

4.1. 叙法副詞の使用に見られるバリエーション

学習者と母語話者による叙法副詞の使用における延べ語数と異なり語数を示すと、表 2 のようになる。

表 2. 叙法副詞の使用における延べ語数と異なり語数 *平均は、小数点第二位を四捨五入(以下同様)

対象者 使用数	学習者							母語話者
	初級	中級前半	中級	中級後半	上級前半	上級	母語話者相当	
	12 名	38 名	73 名	126 名	115 名	34 名	2 名	
延べ語数	24	556	1484	2974	3288	1090	69	2551
一人当たりの平均出現頻度	2.0	14.6	20.3	23.6	28.6	32.1	34.5	51.0
異なり語数	7	17	25	34	45	35	14	50
一人当たりの平均出現頻度	0.6	0.4	0.3	0.3	0.4	1.0	7.0	1.0

² 発話データには、このほかにも、絵描写タスクによるデータが含まれているが、絵描写の場合、調査を実施していない学習者がいる。調査の結果に影響する可能性があると考え、考察の対象からは除外した。

³ I-JAS では、学習者の日本語能力を、SPOT (Simple Performance-Oriented Test) と J-CAT (Japanese Computerized Adaptive Test) の 2 種類で測定している。本調査では、レベルがより細分化されている J-CAT のスコアを採用した。

胡(2019, 2022)でも指摘されているように、学習者の場合、全体的な傾向として、母語話者と比べて、産出される叙法副詞の頻度や種類が少ないことがわかる。胡(2022)では、習熟度が上がるにつれて、産出の傾向が母語話者に近づいている傾向が見られるとされていた。たしかに、全体的には、そのような傾向があると捉えることも可能であるように見受けられる。しかし、延べ語数の一人当たりの平均出現頻度は、上級や母語話者相当のレベルであっても、母語話者程度には至っていない。また、上級前半までは、延べ語数は増えても、異なり語数はほぼ横ばい状態であることから、叙法副詞の産出は増えても、同じ副詞を繰り返し使用していることが窺える。

4.2. 産出されやすい叙法副詞と産出されにくい叙法副詞に見られる特徴

表3は、学習者によって産出された叙法副詞をリスト化し、出現数、および当該のレベルにおいて個々の副詞が占める割合を示したものである。表中の「-」は、出現なしを表す。

表3. 日本語学習者によって産出された叙法副詞

副詞 (五十音順)	初級 12名		中級前半 38名		中級 73名		中級後半 126名		上級前半 115名		上級 34名		日本語母語話者相当 2名	
	出現数	割合(%)	出現数	割合(%)	出現数	割合(%)	出現数	割合(%)	出現数	割合(%)	出現数	割合(%)	出現数	割合(%)
あまり (否定用法)	5	20.8	119	21.4	275	18.5	624	21.0	623	18.9	266	24.4	32	46.4
あんがい	-	-	-	-	-	-	-	-	1	0.0	-	-	1	1.4
いくら	-	-	-	-	2	0.1	-	-	11	0.3	4	0.4	-	-
いったい	-	-	-	-	1	0.1	6	0.2	-	-	2	0.2	-	-
おそらく	-	-	-	-	-	-	2	0.1	-	-	-	-	-	-
かえって	-	-	-	-	-	-	-	-	4	0.1	-	-	-	-
かならず	-	-	2	0.4	11	0.7	20	0.7	24	0.7	13	1.2	-	-
きっと	-	-	-	-	9	0.6	17	0.6	23	0.7	4	0.4	-	-
けっして	-	-	-	-	-	-	-	-	1	0.0	-	-	-	-
さすがに	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	0.3	-	-
しょうじき	-	-	-	-	-	-	10	0.3	5	0.2	4	0.4	2	2.9
せっかく	-	-	-	-	1	0.1	4	0.1	13	0.4	1	0.1	-	-
ぜひ	-	-	1	0.2	9	0.6	34	1.1	43	1.3	17	1.6	-	-
せめて	-	-	-	-	-	-	-	-	1	0.0	3	0.3	-	-
ぜんぜん (否定用法)	3	12.5	64	11.5	162	10.9	246	8.3	266	8.1	52	4.8	8	11.6
たいして	-	-	-	-	-	-	-	-	1	0.0	-	-	-	-
たいてい	-	-	23	4.1	32	2.2	9	0.3	1	0.0	3	0.3	1	1.4
たしか	-	-	1	0.2	-	-	-	-	4	0.1	4	0.4	-	-
たとえ	-	-	-	-	-	-	4	0.1	7	0.2	-	-	-	-
たぶん	10	41.7	227	40.8	630	42.5	842	28.3	821	25.0	313	28.7	8	11.6
ちっとも	-	-	-	-	-	-	-	-	2	0.1	-	-	-	-
つまり	-	-	-	-	1	0.1	6	0.2	5	0.2	1	0.1	-	-
どうか	-	-	-	-	-	-	2	0.1	3	0.1	-	-	-	-
どうして	2	8.3	9	1.6	10	0.7	18	0.6	14	0.4	3	0.3	-	-
どうしても (希望・当為/否定)	-	-	-	-	1	0.1	9	0.3	30	0.9	-	-	-	-
どうせ	-	-	-	-	-	-	1	0.0	2	0.1	3	0.3	-	-
どうぞ	-	-	-	-	1	0.1	-	-	5	0.2	1	0.1	-	-
どうも	-	-	-	-	-	-	1	0.0	-	-	-	-	-	-
とても (否定用法)	-	-	-	-	-	-	-	-	2	0.1	-	-	-	-
とにかく	-	-	1	0.2	1	0.1	14	0.5	17	0.5	10	0.9	1	1.4
ともかく	-	-	-	-	-	-	-	-	2	0.1	-	-	-	-
なかなか (否定用法)	-	-	4	0.7	7	0.5	8	0.3	25	0.8	2	0.2	-	-
なぜ	-	-	-	-	3	0.2	4	0.1	13	0.4	2	0.2	2	2.9
なぜか	-	-	-	-	-	-	-	-	3	0.1	1	0.1	-	-
なるべく	-	-	-	-	-	-	1	0.0	9	0.3	7	0.6	-	-
まさか	-	-	-	-	-	-	-	-	2	0.1	1	0.1	-	-
まだ (否定用法)	1	4.2	21	3.8	35	2.4	106	3.6	82	2.5	44	4.0	1	1.4
まったく (否定用法)	-	-	-	-	-	-	4	0.1	14	0.4	10	0.9	-	-
まるで (肯定用法: 比況)	-	-	-	-	-	-	1	0.0	1	0.0	-	-	-	-
もう (否定用法)	-	-	2	0.4	12	0.8	29	1.0	56	1.7	18	1.7	1	1.4
もし	-	-	13	2.3	65	4.4	221	7.4	230	7.0	34	3.1	1	1.4
もしかしたら	-	-	-	-	-	-	-	-	1	0.0	2	0.2	-	-
もしかして	-	-	2	0.4	3	0.2	1	0.0	14	0.4	-	-	-	-
もしかすると	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	0.1	-	-
もちろん	-	-	18	3.2	33	2.2	62	2.1	38	1.2	13	1.2	4	5.8
やはり	2	8.3	7	1.3	69	4.6	467	15.7	737	22.4	195	17.9	2	2.9
よく (習慣・確率)	1	4.2	42	7.6	110	7.4	198	6.7	121	3.7	50	4.6	5	7.2
よほど (推定/仮定)	-	-	-	-	-	-	1	0.0	1	0.0	-	-	-	-
わざと	-	-	-	-	-	-	1	0.0	3	0.1	2	0.2	-	-
わざわざ	-	-	-	-	1	0.1	1	0.0	7	0.2	1	0.1	-	-
合計	24	100.0	556	100.0	1484	100.0	2974	100.0	3288	100.0	1090	100.0	69	100.0

この表をもとに⁴、「初級」「中級前半」から出現している(=比較的産出されやすい)副詞と、「中級」以降にならないと出現しない(=比較的産出されにくい)副詞をリスト化すると表 4 のようになる。ただし、2 人以上の学習者に使用されていて、かつ、「中級」以降については複数のレベルにまたがって出現する副詞に限って示したものである。なお、「中級前半」において、4 件出現している「なかなか(否定用法)」と2件出現している「もしかして」は、同一話者によるものであったため、「中級」以降にならないと出現しない副詞としている。

表 4. 習熟度別に見る叙法副詞の出現

「初級」「中級前半」から出現している副詞	「中級」以降にならないと出現しない副詞
【初級から】あまり(否定用法)、ぜんぜん(否定用法)、たぶん、どうして、やはり	【中級から】いくら、きっと、ぜひ、なかなか(否定用法)、なぜ、もしかして
【中級前半から】かならず、たいてい、まだ(否定用法)、もう(否定用法)、もし、もちろん、よく(習慣・確率)	【中級後半から】いったい、しょうじき、せっかく、たとえ、つまり、どうか、どうしても(希望・当為/否定)、とにかく、まったく(否定用法)
	【上級前半から】たしか、どうせ、なるべく

「初級」「中級前半」から出現している副詞は、すべて初級レベルで導入される副詞である⁵。また、特定の述語形式と呼応現象をもつ副詞が多いことが特徴的である(12 種のうち、7 種;あまり(否定用法)、ぜんぜん(否定用法)、たぶん、どうして、まだ(否定用法)、もう(否定用法)、もし)。特に、「初級」から、ほかの叙法副詞に比べて高い頻度で出現している「あまり(否定用法)」「ぜんぜん(否定用法)」「たぶん」は、いずれも特定の述語形式と呼応する副詞である。

「中級」以降にならないと出現しない副詞も、「いくら」「きっと」「ぜひ」「なかなか(否定用法)」「せっかく」「たとえ」「とにかく」「まったく(否定用法)」「たしか」は初級レベルで導入されることが多い副詞である。この中には、「いくら[～でも]」「なかなか[～ない]」「せっかく[～のに]」のように、特定の述語形式と呼応する副詞も含まれている。同じく初級レベルで導入され、呼応現象をもつ副詞であるにも関わらず、出現するのが遅いのはどのような要因がはたらいているのだろうか。「中級」以降にならないと出現しない副詞全般に見られる特徴に注目すると、「初級」「中級前半」で出現する副詞と比べて、話し手の評価・感情がより前面化する副詞が多く含まれていることがわかる(18 種のうち、13 種;きっと、ぜひ、なかなか(否定用法)、もしかして、いったい、しょうじき、せっかく、たとえ、どうか、どうしても、たしか、どうせ、なるべく)。例えば、例(1)～(3)のbでは、単に「否定」(例1)、「質問・疑念」(例2)、「仮定条件」(例3)の程度を強調・限定したり、文の叙法性を明確にしたりしているだけでなく、期待していることが実現しないことへの慨嘆(例1)や憤慨(例2)、諦め(例3)といった、話し手の評価・感情が前面に出ている。「なかなか[～ない]」「せっかく[～のに]」のように、初級で導入され特定の述語形式と呼応する副詞であっても出現が遅いのは、話し手の評価・感情が前面に出る副詞であるからではないかと考える。

- | | |
|---------------------|----------------------------|
| (1) a. 過去問が解けない。 | b. 過去問が <u>なかなか</u> 解けない。 |
| (2) a. いつ帰ってくるの？ | b. <u>いったい</u> いつ帰ってくるの？ |
| (3) a. やるなら、徹底的にやる。 | b. <u>どうせ</u> やるなら、徹底的にやる。 |

⁴ 複数の意味・用法をもつ副詞については、該当する意味・用法を括弧内に示す。また、いわゆる口語体とされているもの(例:あんま/やっぱ)は異形態として扱い、代表形(例:あまり/やはり)に含めた形で示している。なお、数には、正用、誤用の両方を含めている。ただし、言い淀みによる繰り返しの使用は含めていない。

⁵ 副詞が導入されるレベルは、朴(2022)を参照した。また、3 種以上の日本語教科書において導入されている副詞を、そのレベルで導入されるものとしてみなした。

ただし、この種の副詞は、使用はされていても、その頻度は高くない。「ぜひ」を除いては、当該レベルにおける叙法副詞の中では、いずれも割合が 1.0%未満にとどまっている。習熟度が上がっても、「初級」「初級前半」から使われている叙法副詞が依然として多く占めていることが窺える。

一方、母語話者の使用に、このような偏りは見られない。表 5 は、母語話者によって産出された叙法副詞のうち、出現数における上位 20 語をリスト化したものである。1～7 位にくる副詞は、学習者において「初級」「中級前半」から出現する副詞と同じであるものの、8 位以降には、「中級」以降で出現する副詞、なかでも、話し手の評価・感情が前面に出る副詞も多く含まれている。

表 5. 日本語母語話者によって産出された叙法副詞

副詞 (出現数順)	出現数	割合(%)	一人当たりの平均出現頻度
1 やはり	759	29.8	15.2
2 あまり (否定用法)	451	17.7	9.0
3 たぶん	381	14.9	7.6
4 ぜんぜん (否定用法)	211	8.3	4.2
5 よく (習慣・確率)	98	3.8	2.0
6 もう (否定用法)	84	3.3	1.7
7 もちろん	55	2.2	1.1
8 なかなか (否定用法)	50	2.0	1.0
9 どうしても (希望・当為/否定)	41	1.6	0.8
10 まったく (否定用法)	36	1.4	0.7
11 ぜひ	31	1.2	0.6
11 もし	31	1.2	0.6
12 たしか	28	1.1	0.6
12 まだ (否定用法)	28	1.1	0.6
13 とにかく	27	1.1	0.5
14 おそらく	26	1.0	0.5
15 なるべく	25	1.0	0.5
16 きっと	24	0.9	0.5
17 もしかしたら	17	0.7	0.3
18 しょうじき	15	0.6	0.3
18 せっかく	15	0.6	0.3

4.3. 叙法副詞の使用における母語別に見られる特徴

4.1 節、4.2 節で述べたことを母語別に見ると、次のような特徴が見られる。まず、バリエーションについては(表 6)、母語を問わず、習熟度が上がるにつれて叙法副詞が使われる頻度は増加する。しかし、中国語を母語とする学習者(以下、「CHN」とする)と韓国語を母語とする学習者(以下、「KOR」とする)は、英語を母語とする学習者(以下、「ENG」とする)と比べて、より早い段階で様々な叙法副詞を使えるようになる傾向がある⁶。延べ語数においては、一人当たりの平均出現頻度も含めて、ENG が、CHN と KOR よりも多い(・高い)傾向にあることから、ENG は、CHN や KOR と比べて、同じ副詞を繰り返し使用する傾向がより強い傾向にあると言える。

表 6. 日本語学習者の母語・習熟度(中級～上級前半)別にみる叙法副詞の延べ語数と異なり語数

使用数	学習者	ENG			CHN			KOR		
		中級	中級後半	上級前半	中級	中級後半	上級前半	中級	中級後半	上級前半
		33 名	21 名	4 名	32 名	76 名	76 名	8 名	29 名	35 名
延べ語数		893	823	252	524	1521	2107	67	630	929
一人当たりの平均出現頻度		27.1	39.2	63.0	16.4	20.0	27.7	8.4	21.7	26.5
異なり語数		15	21	14	22	28	37	11	22	33
一人当たりの平均出現頻度		0.5	1.0	3.5	0.7	0.4	0.5	1.4	0.8	0.9

⁶ 異なり語数の一人当たりの平均出現頻度において、上級前半の ENG が 3.5 と飛び抜けて高い数値となっているが、様々な種類の叙法副詞が使えるようになるレベルでありながら、対象者数の数が極端に少ないことに起因している可能性がある。

次に、産出される叙法副詞のタイプについては(表7)、母語による違いはあまり見られない。母語に関わらず、習熟度が上がっても、上位にくるのは初級レベルで導入される副詞であった。また、話し手の評価・感情が前面に出てくる副詞の使用も、「やはり」以外には見られなかった。

表7. 日本語学習者の母語・習熟度(中級～上級前半)別にみる叙法副詞のタイプ(上位5位まで)

順位	ENG			CHN			KOR		
	中級	中級後半	上級前半	中級	中級後半	上級前半	中級	中級後半	上級前半
1	たぶん	たぶん	たぶん	たぶん	たぶん	たぶん	ぜんぜん／あまり	あまり	あまり
2	あまり	あまり	やはり	ぜんぜん	やはり	やはり	よく	たぶん	たぶん
3	よく	やはり	あまり	あまり	あまり	あまり	もし	やはり	やはり
4	ぜんぜん	よく	ぜんぜん	もし	もし	もし	たぶん	ぜんぜん	ぜんぜん
5	やはり	ぜんぜん	もう／よく	よく	ぜんぜん	ぜんぜん	やはり	よく	よく

5. おわりに

学習者による叙法副詞の使用に見られる傾向をまとめると、以下のようになる。

- ①学習者の場合、母語話者と比べて、産出される叙法副詞のバリエーションが少ない。(4.1 節)
- ②学習者にとって産出されやすい叙法副詞とそうでない叙法副詞がある。初級で導入され、かつ、特定の述語形式と呼応現象をもつ叙法副詞は産出されやすい。一方、初級で導入される副詞であっても、話し手の評価・感情が全面に出る叙法副詞は産出されにくい。(4.2 節)
- ③母語による違いは、以下の通りである。まず、CHN と KOR において、ENG よりも早い段階で、より様々なタイプの叙法副詞の使用が見られる。また、ENG は、CHN や KOR と比べて、同じ副詞を繰り返し使用する傾向がより強く見られる。なお、産出される叙法副詞のタイプにおいて大きな違いは見られない。(4.3 節)

本調査では、習熟度別に、叙法副詞の産出の様相を見ることで、話し手の評価・感情を表す副詞の産出は難しく、また、「中級」「中級後半」以降に産出されるようになるものの、使用頻度、種類ともに少ないことがわかった。川口・佐々木(1996)は、作文データを対象とした考察ではあるが、母語話者の副詞の発達過程が示されている。習得が遅い副詞の中には、本発表でいう話し手の評価・感情を表す副詞も多く含まれている。話し手の評価・感情を表す副詞の産出が容易でないことは、学習者に限らず、日本語の副詞習得一般に見られる傾向とも言えるかもしれない。この点に関する考察は今後の課題とする。

参考文献

- 胡娜(2019)「日本語学習者における叙法副詞の習得—中国語・韓国語・英語母語話者の産出文から—」『2019 CAJLE Conference Proceedings』98-105. カナダ日本語教育振興会。
- (2022)「日本語学習者による陳述副詞の使用実態—日本語学習者コーパス I-JAS を用いて—」『東京外国語大学国際日本学研究』2: 240-255. 東京外国語大学大学院国際日本学研究院。
- 川口良・佐々木泰子(1996)「日本人と日本語学習者の作文における副詞の発達過程に関する研究」『お茶の水女子大学人文科学紀要』49: 219-238. お茶の水女子大学。
- 工藤浩(1982)「叙法副詞の意味と機能—その記述方法をもとめて—」『研究報告集』3: 45-92. 国立国語研究所。
- (2000)「副詞と文の陳述的なタイプ」『日本語の文法3 モダリティ』161-243. 岩波書店。
- 李在鎬・小林典子・今井新悟・酒井たか子・迫田久美子(2015)「テスト分析に基づく「SPOT」と「J-CAT」の比較」『第二言語としての日本語の習得研究』18: 53-69. 凡人社。
- 朴秀娟(2020)「中級日本語学習者の口頭表現に見られる副詞の特徴—ストーリーテリングを中心に」『日本語／日本語教育研究』11: 19-34. ココ出版。
- (2022)「日本語教科書における副詞の扱いについて」『神戸大学留学生教育研究』6: 23-47. 神戸大学国際連携推進機構国際教育総合センター留学生教育部門。